農政産業観光委員会　県内調査活動状況

１　調査日　　令和６年１月２５日（木）

２　出席委員（９名）

委 員 長　　藤本　好彦
副委員長　　小沢　栄一
委　　員　　浅川　力三　　卯月　政人　　笠井　辰生　　流石　恭史
　　大久保俊雄　　名取　　泰　　向山　憲稔
　　※卯月政人委員は午後のみ出席

欠席委員　　なし

地元議員
午　　前　　中村　正仁　　志村　直毅

３　調査先及び調査内容

（１）【山梨県立博物館】
収蔵資料のデジタル化について

〇調査内容（主な質疑）

問）　資料を高精度な画像で保存して情報発信するとのことだが、博物館の役割として今後求められる観光や地域振興について、観光や地域振興は来てもらうことが重要だが、その辺りはどう考えているのか。

答）　博物館収蔵資料は２７万点ほどあり、その１割程度をデジタルデータ化している。可能なものからホームページで公開しており、ホームページを見て興味をもっていただいた上で、来館してデジタルビューを体感してもらいたいと考えている。

問）　地元笛吹市との連携はどうか。文化財は市の教育委員会文化財課で、観光は商工観光課の所管である。縄文文化に関する展示などは、教育委員会は承知しているが、商工観光課は把握していない、ということがある。また、地元にある様々な博物館との連携はどうか。

答）　笛吹市との連携を行っており、私が赴任してから副市長と面談し、今後連携を図ることとなった。また新型コロナウイルスが流行っていた時期には、笛吹市からコロナ関連の資料を提供してもらうなどした。市役所とは部局横断的に連携している。また、県立博物館は、博物館の協議会で中心的な役割を果たし、他の博物館とも連携を図っている。

問）　デジタルデータの著作権の管理や不正コピー防止の取り組みはどうか。

答）　デジタルデータについては、今の段階では、利用する方への注意喚起にとどまっている。まれに放送局等の使用に無断でされてしまうこともあり、発覚と同時に是正をするよう取り組んでいる。将来的には、デジタル的な技術でガードをかけることも検討しなければならないと考えているが、今の段階ではそこまでできていない。

問）　六郷に印章資料館があり、中国の十鐘山房印挙という古い印鑑帳がある。１０数年前にそのデータの保管をサポートしたことがあるが、やはりデータ管理があまりできてないような状況があった。県立博物館は、県内の博物館のネットワークの中で、幅広く対応しているということなので、他の博物館の資料もいずれ取りまとめてもらえるのか。

答）　県内の博物館については、県立博物館がハブとなって、各博物館を連結させている。山梨県は全国の中でも、博物館施設が非常に多いところで、今現在１３０以上の博物館があり、ミュージアム甲斐ネットワークという組織で研修会を共有したり、日頃の連携を図っている。博物館法で定められたデジタルアーカイブについても、取り組んでいく。

※説明、質疑の後、総合農業技術センター高軒高ハウスの視察を行った。

（２）意見交換会

① 出席者　新規就農者及び就農後１０年程度経過された方々

② 内容　「山梨県の農業を担う人材確保・育成について」

〇主な意見

委　員）　地元から新規就農者の皆さんが何とかしてくれると思われているけれども、自分たちとしてできることにギャップがあるという発言があった。そのことについて、もう少し詳しい内容を教えてほしい。どういうことを地元の方が求めていて、皆さんが応え切れないギャップの部分を説明してください。

出席者）　まず一つは、土地の問題である。引退される高齢の農家や、地元で農家をやっていた方が亡くなって、その息子が農業をできないから誰かに貸したいというのが一番多い。これは、土地のよし悪しに関わらず話が来てしまうので、悪い土地はどうしようか、ということで悩んだりする。

もう一点が、役職である。農業委員や直売所の理事、地域防災なら消防など、年上の方々がやっていたものを下の我々が引き継いだときに、上の人は、もうこれで終わったという感じでノータッチになってしまう。次に相談に行ったときには、もう自分は年だからそちらで何とかしてくれという話で終わってしまうことが見受けられる。

他には、地域のコミュニティーの中に我々が完全に溶け込めているかというと、私のことを知らない農家も地元にはかなりいる中で、コミュニティーに入る前に農家の要望にさらされてしまうと、よく思わない方もいて、自分が勝手に入り込んでしまったという錯覚を周りに与えてしまうこともある。きちんとした浸透のさせ方を地元の方ができないというのも課題と思っている。

出席者）　農地に関しては、二つのルートでの課題を感じている。一つが、農業をやっている方から譲り受ける話が来るパターンでの課題である。渡す側からすると、自分の規模を縮小していくときに、やりづらい農地から渡したいというのが当然だと思う。自分もそうなので分かるが、こちらからすると、経営が安定しない中で、やりづらい、形が悪い、土が悪い農地を引き受けるという体力がない。ただ、その方と良好な関係を築いていかないと、その先にある優良農地というのは見えてこないので、その辺りのバランスがとても難しいというのが課題として考えられる。

もう一つは、公社経由でもらう話だが、ある程度大きい面積の畑、例えば、私の地域だと一番大きい畑で５反歩の畑があり、その畑が来たときに、私の経営の中の３．５町歩のうちの０．５町歩が来てしまうことになり受けられない。一方で、例えば、レタスをつくっている方は、２０町歩も３０町歩もやっている中の５反歩が増えるのであれば、借りられるタイミングの問題があると思っており、一時的に農地をプールしておけるとやりやすくなると思っている。

委　員）　委員会でもスマート農業やＩＣＴ活用について研修を行ったりしているが、そういったところをどうやって取り入れているのか伺いたいのと、女性も参加されているので、女性農業者の皆さんとのネットワークでの取り組みや、女性農業者として苦労や課題があれば伺いたい。

出席者）　スマート農業については、全く取り組んでいないというのが現状で、水稲だと無人の田植え機の導入などがあるが、多額の経費がかかるので、今、取り組もうとは思っていない状況である。特にそういうものを使わなくても、８年たって自分の勘で十分、データを活用した栽培と同レベルの栽培管理ができていると感じているので、今のところ、スマート農業を導入しようとは考えていない。

出席者）　まず、スマート農業だが、導入には結構なお金がかかり、そんなに大きな規模をやっていないので、今のところ、私も情報収集にとどめている状態である。

女性農業者とのつながりだが、農林水産省の農業女子プロジェクトの山梨県版で、山梨農業女子という団体がある。これは、中北農務事務所が、女性農業者向けの研修をした際に集まった女性農業者で立ち上げた団体である。会長は南アルプス市の方だが、月に１回オンラインで定例会、３か月に１回リアル定例会をしている。先月２３日にリアルな定例会があり、今回は研修として東京の大田市場や農林水産省、都心型農業をしている方の農園に、メンバー４０人のうち１０人で研修に行ってきた。

私も県外から来たので、全く知り合いがいない中で、こういった女性農業者とのつながりというのは、本当に助けられている。心強くもあり、農業だけやっていると、繁忙期は話し相手が狭まってしまうが、その中で気分転換となり、本当に助けられている。

女性農業者として困ることは、機械がとても苦手なので、機械は触らせてもらえない。トラクターは免許もあるので、私がメインでやっている。私が苦手な内容は、夫が得意なので、それをうまく交代しながらやっている。

あと、トイレ問題があり、家に帰ったりすると、それで作業時間が取られてしまうので、どうにかしたいなと思いながらどうもできない状態である。

出席者）　ハウスのほうで環境制御とＣＯ２の発生装置等々を入れてはいるのだが、費用対効果が悪い。生育期間の短縮はできるが、できても１５日から２０日で、超早期加温の人には追いつかないというのが現状である。

ほかの新築ハウスの加温シャインマスカットに比べて、ざっと見積もって２５０万ほど余計にかけているところだが、稼働を始めて今年で５年目で、回収できているかというと首をかしげる。

コロナになる前に建てたが、当時５キロコンテナで２万６，０００円から２万４，０００円が相場だったものが、コロナが明けて、去年、盆までは５キロコンテナ、秀品のもので大体１万８，０００円が相場である。想定から６，０００円ほど下がってしまった。大雪の被害から立ち直った峡東のシャインマスカットも、そろそろ出てくる頃であり、そうなると生産過剰で、５キロコンテナで１万８，０００円にもならな

いという想定をしている。ハウスのシャインマスカットに関しては、長年の経験でやられている方のほうが、費用対効果は高いと思う。環境制御を入れれば、設定したとおりハウスが勝手に稼働してくれるので手間はかからないが、朝・昼・晩に見に行ったほうが、手間はかかるけれど、お金はかからないと感じている。

出席者）　桃を作っているが、機械として導入したいのは、桃の糖度を測る非破壊の糖度計で、センサーを当てると桃の糖度が分かるものがあり、それを導入して出荷の時期を見極めるようにしたいと思っている。その糖度計に硬度計も付いているものがあるが、値段が高いので手が出ない。

委　員）　就農を希望される方や就農に関心がある方への働きかけの支援について、意見をいただきたい。

出席者）　まず１つ目に、我々新規就農者は、農業以外のことをやるとは思っていないところがあり、役職の話などもきちんと伝えられた状態で就農したいということがある。

もう一つが、今、支援が一方通行の支援になっているところがあるので、地元の農業者や地元の方に対して、農業の担い手が自分たちの地域にどれだけ必要なのかを気づいてもらえるような機会や話し合いの場があるといいのではないか。自分たちの置かれた現状や地域にある支援の策を知ることで、それを使って新規就農者を増やせるのだと気づいてもらえれば、より定着につながると思う。

出席者）　オンラインで就農者と希望者を直接つなぐイベントに参加したことがある。実際にこちらの生の声を伝えることができるので、あのイベントはよかったと思う。

他には、自分で何か新しく始めるときに情報収集をしていて、よい例はすぐ見つかる。逆に失敗例はなかなか見つからない。該当者を見つけるのは本当に難しいと思うし、匿名でということになるかもしれないが、一度就農したけれど自分には合わなかった、という経験談も就農サイトにあってもいいと思う。就農希望者が、失敗談から自分は似ているから駄目だ、ここに気をつけていけばいいのだというような参考にできる情報もあると思うので、何か参考にできる形にしていただければと思う。

委　員）　一度就農したけどうまくいかなかったということを、今後、県としても、ホームページ等で公表していくことは難しいか。そこについて意見をもらいたい。

農政部）　山梨県では、現在、就農して１０年以内の方に、山梨県に就農しての実態調査をしている。失敗された方というのも当然いるだろうと想定しており、その方を何名かピックアップした中で、聞き取り調査を行うことを考えている。

その情報をサイトに載せるというのは、個人的な情報もあるので、少し考えていかなければならないところはあるが、いずれにしても、その辺の情報は必要だと感じており、まとめて示すことができるように、今、進めているところである。今年度中にその調査をして、来年度、何とか示していきたい。

出席者）　これから就農を希望される方への支援だが、２点考えてきた。１点目が結構ネガティブな話で、私がもらっている給付金に関してであるが、用途が限定されない年間１５０万円という金額をもらっていた。周辺の同じような農家にもヒアリングしたが、生活費の中に組み込んでしまう経営をして失敗する方と、そうでない方で大きく分かれるという印象を受けた。補助金に関しては麻薬的な意味合いがあるという話をたまに漏れ聞いたりするが、それに近しいものを感じてしまった。

２つ目は、オーガニックという言葉に関しては、ポジティブなイメージが世間にあると思う。それは、体にいい、環境にいいというものと、新規就農を志す方の９割程度が有機栽培に興味があるというアンケート結果もある。山梨県においては、果樹もしくはトウモロコシなどの主要作物があり、そこにしっかりとした次世代の就農者が来てくれるといいと思っていて、その呼び込みの口として、オーガニックというのは使えるのではないかと思っている。オーガニックに興味のある方が就農を考える途中で果樹に興味を持ち、栽培することになれば、それはそれで可能性は広がると思う。キャッチーなオーガニックという言葉から、実際の経営指標なども充実している果樹や水稲、トウモロコシなどの主要作物に担い手が入ってくるような環境を整えるというのは、いいのではないかと思う。

委　員）　生産者側が作るものと消費者側が必要としているもののギャップがあるということだったが、販路拡大のために、県としてどんな支援をすることが望ましいのかお聞きしたい。

出席者）　販路に関する課題については、飼料用米も生産しているのだが、直接養鶏農家に出荷しており、収穫したものを自宅で保管して、毎月出荷するという形を取っているため、収穫が多いときは、収穫物を保管しておく場所が足りなくなってしまうという問題がある。小麦も６月に収穫して、農協に出荷するのが８月から９月頃ということで、やはり一時的に保管しなければならないため、保管庫をどう確保するかが、課題になっている。

委　員）　資材等の高騰が販売する際の価格に反映されないため、経営を圧迫しているとのことだが、行政としては、物価高騰が市場での販売価格になかなか反映できない場合、どのような支援をするべきなのか聞かせていただきたい。

出席者）　市場価格に反映されない場合の対策について、大田市場で学んだばかりのことになるが、全農はお金があるからＰＲがとてもうまい。仲買の方たちもそのＰＲを見て買っていくことが多いということで、ＰＲの大切さを学んだ。山梨県も県を挙げて、「おいしい未来へ　やまなし」をこれから全面に打ち出していくという計画書を見たが、県農産品と言うと、桃、ブドウなどの果樹に力が入るが、県農産品全体、畜産も含めて知名度を上げていってほしい。

「おいしい未来へ　やまなし」の事例として、イベントの情報をもらうが、どうしても自分で持っていく、自分で店頭に立つなど、自分が参加しないといけないという条件がある。繁忙期は対応できないので、本人がいなくても農作物を運べる手段

があればぜひ参加したいので、その辺りの改善と、県農産品の知名度を上げていただきたい。

委　員）　地域の役職の在り方についての提案をお聞きしたい。

出席者）　役職の在り方について、農村といっても、やはり社会だというのが就農したときの感想で、役職や上に立つ人間がいないと組織として成り立たないところもあり、また労働組合的な意味合いもあると思う。農家の寄り合いは、ＪＡなどの団体に対して意見や要望を伝えるときに必要だということもあり、一概に今の役職をなくして、若者に負担をなくすというのはナンセンスだと思っている。役職が次々に回転していくというのを農村に取り入れて、順番制にしてもよいと思いつつ、ただ、それだと、その地域からいなくなる移住者もいると思うので、その負担をＩＴ化によるリモート会議にすることで、やることを限定して、役職を誰でもできるようにしていくことも大切だと思う。

委　員）　長野県のシャインマスカットは冬場にも出荷できるような体制を整えてているが、本県でも果樹の高付加価値化の取組を進めていく上で、県としての支援策をお聞きしたい。

出席者）　山梨県と長野県のブドウ生産には違いがある。長野県は、産地による品種の特色はいらない、とりあえず生産量を上げようということである。ブドウで３００グラムから５００グラム以内のパック配送など、問屋が使いやすい商材をパッケージ的に作って、それを大量に市場に発送しようというもので、シャインマスカットだけの生産量で言えば、山梨県より多い。年間を通じて、大量に作ったシャインマスカットを処理しなければならないので、貯蔵も含めて、規格化して売りに出すということに長野県はたけていると思う。

地元のＪＡでも、低温貯蔵の試験をしてはいるのだが、質を担保するのに生産量を一定化しなければならない。山梨で同様の取組をするのであれば、ある程度のロット数が必要という話になってくるので、そうなると長野のように、全県で集まってブドウを確保しなければならないという流れになってくる。そのためには、全県でブランドを一つ作るというのが一つの回答になるのではないかと思う。

委　員）　農地の貸借について、農地の流動化を進めていく上で、一時的にプールするような農地の貸借の仕組みがあればいいとのことだったが、ＪＡなどに半年や１年は面倒を見てもらえるようなアイデアを提案していただきたい。

出席者）　農地を貸したいという話がきたときに、プールできないかというアイデアだが、問題点が２つあり、地代と土地の管理だと思っている。

地代に関して言うと、地主が貸している状態では、中間管理機構からお金が流れることになるが、地主はその収入を当てにしているので、プールしているときに賃料が入ってこないのは困る。その地代を中間管理機構が出すというのはなかなか難し

い。だからこそ、中間管理機構はなるべく早く手を挙げてくれる方に貸したいという流れになる。

それに加えて、プールしておけばしておくほど、畑は草が生えるという状況になってしまうので、その管理を誰が担うのかという２つ目のポイントがある。畑の管理について言うと、北杜市の中で有機農業者の協議会が立ち上り、その中で、有機農業をやっていくには、ある一定の年数、有機的に管理をしなければならないということもあるので、新規就農者が入ってきた際に、すぐに有機生産物として農産物を出せるような状況を作るために、土地をプールをしておかないといけないという議論が起きた。そういった有志の中で協力して畑を管理することを取り組んでいけるのではないかと思う。

委　員）　規格外品を有効に利用するような出荷形態があれば、アイデアを提案いただきたい。

出席者）　規格外品になる理由として、桃に虫に食われた跡や、病気による斑点がついたものと、収穫時に既に柔らかくなっていて、輸送時にぐずぐずになってしまうものがある。輸送のために、秀品や優品は硬いうちに取って出荷しているが、木になった状態で柔らかくなったものは、秀品や優品より多分甘くなっている。そういうものだけを集めて、完熟桃として売ることができるのではないか思っている。

※意見交換会の様子